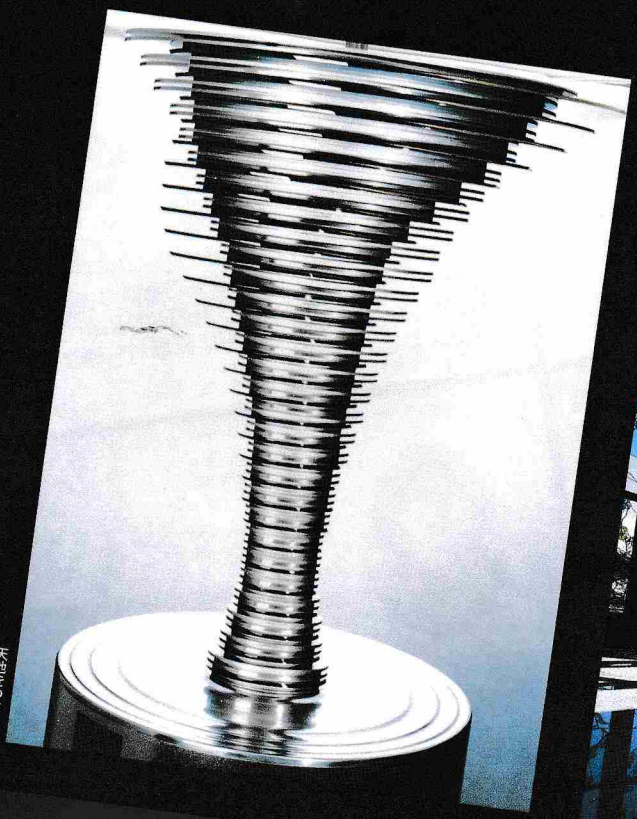
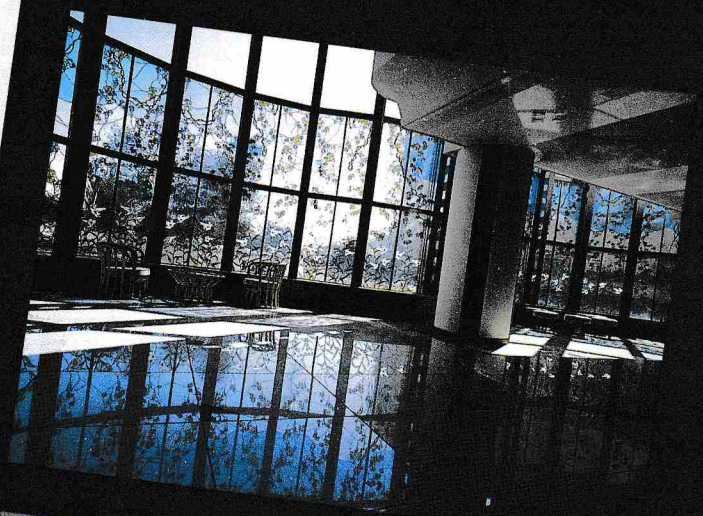
NO.27 1998.12

Ci



天地をつなぐ水



キリストはぶどうの木　私はその枝の一つ

未来を拓く

"Waltz of Wave" 波の円舞曲

aaca
社団法人 日本建築美術工芸協会

作家
NAOYA SAKAGAMI
坂上 直哉
東京都調布市西つつじヶ丘2-18-8
SAKAビル
TEL 03-3308-8418

「天地をつなぐ水」
設置場所：積水化学工業㈱
本社ロビー
2700㎜H×1100㎜W×900㎜D

水は分裂しているものを絶えずつなぎ、それらを循環の内に取込みつつ結合し、全き宇宙を形成する。水はすべての生命の揺り篭。作品は天に向かって上昇していく大いなる循環を、天と地をつなぐ竜巻として表現しました。

ステンドグラス作家
ETSU ENOTO
榎戸 悦
仙台市太白区八木山弥生町5-10
TEL 022-229-0171

「キリストはぶどうの木　私はその枝の一つ」
設置場所：東京都調布市緑ヶ丘1の25
白百合女子大学
3500㎜H×46㎡

白百合女子大学ロビー窓いっぱいに手吹きガラスの持つ水が流れる様なテクチャーの透明なガラスが揺らぎを感じさせる中に、ぶどうと白ゆりの花で楚々とした枝ぶりの流れをガラスの中に表現した静かなステンドグラスです。

壁画・モニュメント創作、壁画家
EIKO MATSUI
松井 エイコ
東京都三鷹市井の頭3-32-48-5601
TEL 0422-48-5601

「未来を拓く四つの力」
設置場所：北海道士別市
ふれあいの道公園「親水の道」
3100㎜H×3000㎜W

士別市の未来を象徴する空間として、ガラスモザイク壁画、モニュメント、オブジェを創作。「親水の道」全体のデザインも建築家と協同し、「人々が心を響き合わせ、共に未来へ向かう」ステージとして、イメージした。

テキスタイル デザイナー
KYOKO HASHIMOTO
橋本 京子
東京都世田谷区松原6-24-21
TEL 03-3328-3300

"Waltz of Wave" 波の円舞曲
設置場所：東京都大田区
大田区民ホール　ホワイエ
1500㎜H×6600㎜W×80㎜D

大田区民ホールのアートワーク計画のテーマである「波」をベースに、作品全体にデリケートな表情を現しながら躍動感のあるタピストリーを制作しました。日本の伝統的な高密度の織技法で織り上げられています。

CONTENTS

芦原義信会長が文化勲章受章 ……1
「文化・芸術と都市空間」 ……2
aaca事業委員会研修旅行 ……5
時代の華一輪 ……8
aacaトーク ……9

■表紙デザイン
高部　多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合せ下さい。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行いますのでご了承下さい。

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会　広報委員会
広報担当理事　柳澤孝彦
委　員　長　玉見　満
副 委 員 長　高部多恵子
冨田俊男、北村孝昭、石田眞人
渡部毅志、高塚信吾、山崎輝子

制作協力：㈱SP建材エージェンシー

芦原義信氏が文化勲章受章

政府は23日、建築家・芦原義信氏(80)ら5人に98年度の文化勲章を贈ることを決めた。親授式は11月3日の文化の日に皇居で行われる。

芦原氏は、戦後ロックフェラー奨学金による欧州視察を経て、56年10月芦原建築設計事務所を設立。70年6月から79年の定年退官まで東大教授、その後日本建築家協会会長を務め、88年11月日本芸術院会員、89年11月勲二等、90年4月日本建築学会大賞、91年11月文化功労者に選ばれた。

この間、東京都オリンピック駒沢体育館、モントリオール世界博日本館、国立歴史民俗博物館などの作品がある。中でも67年のモントリオール世界博日本館の建築設計は、日本の伝統美を結晶させた作品として世界の注目を集めた。以後、次々と発表した秀作に見る「町並みの美学」の発想は、建築界に強い影響を与えている。

芦原義信氏(あしはら・よしのぶ)1942(昭和17)年東大工学部建築学科卒、東大名誉教授、80歳。東京都出身。自宅は東京都渋谷区西原3の47の10。

「建築工業新聞」(98年11月3日)より転載

aaca会長 芦原 義信先生

芦原義信先生、文化勲章受章誠にお目出度う存じます。会員一同心よりお祝い申し上げます。

一寸、祝電のような書き出しになりましたが、私共㈳日本建築美術工芸協会は、一度ならず存続の危機に見舞われたこの会を建て直し、会長として今日の発展を築いて頂いた事実に対して、心よりお礼申し上げると共に、お祝いを申し上げたいと存じます。

私的な話の展開をお許し頂けるならば、私が先生の知遇を得たのは、一九六四年米国より帰り、建築との関連の中に新しい陶芸の可能性を模索していた頃で、そんな私に先生はいち早く仕事の機会を作って下さいました。

芦原建築の特徴の一つは、初期の頃から終始芸術家の協力を正面から受け入れて来られたことにあると思います。ご親族に高名な藤田嗣治をいただく血筋からも見られるように、先生の優れた審美眼と勘の鋭さは天性のものであり、我々芸術の世界に身を置くものが常々畏敬の念を禁じ得ないところでもあります。建築は総合芸術だからと云えばそれまでですが、個性の異なる作家を取り込んでゆく作業は、やはり先生の並みはずれた懐の深さが無ければ実現されて来なかったであろうとの思いが一層深まるばかりです。

私事ではありますが、私が東北芸術工科大学の学長に就任した際に旧友たちが激励会を企画してくれたことがあり、はからずも先生ご自身にもご出席頂いたことがあります。地元山形の山寺の素晴らしい宿で先生の長寿をお祝いしつつ過ごした夜は私にとって忘れ得ない至福の時でした。

先生の功績に対して、栄えある勲章が授与されたことは私共にとっても誠に嬉しく、夫人はもとより沢山の友人知人の愛を一身にかち得て文化勲章に結実した先生のお人柄と人生の歴史に対して、心からお祝いを申し上げたいと思います。

先生、本当にお目出度う存じます。

㈳日本建築美術工芸協会理事
東北芸術工科大学学長
會田 雄亮

「文化・芸術と都市空間」

音環境・音文化

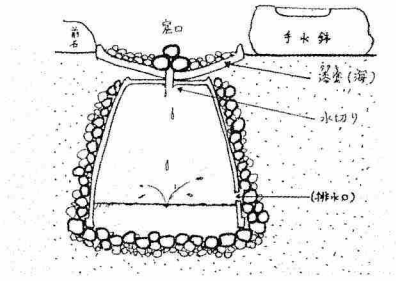
今日、私たちをとりまく都市空間の中で、昔についての環境は多種多様かつ複雑化してきている。人間の五官のうちで、環境を文化として受けとめ、芸術的理解を感知する器官は視覚と聴覚である。ともに瞬時のうちに私たちの感性に訴えかけてくる。とくに聴覚は、好むと好まざるにかかわらず、身体の中にとび込んでくる。

古来日本人は、気候、風土などとあいまって自然の音による繊細な音の文化をつくりあげてきた。鳥のさえずり、虫の声、川のせせらぎ、風にそよぐ木の葉ずれ等、源氏物語に登場し、美人画の脇役として描き添えられてきた。俳句の世界では季語として今も生きている。また、日常生活から発する物売りの声、お寺の鐘の音、祭りの太鼓、風鈴の音に風情を感じた。そのほか、水琴窟やししおどし等、音を巧みにとり入れた演出をして、独特の音文化を形成してきた。

音を積極的に作り出す文化に音楽があるが、これにはわが国で伝統的な邦楽と明治以降に輸入された洋楽と、異なった系統のものが混在している。

こう振り返ってみると、現在の日本の音環境はけっして好ましいものとはいえない。都市空間を考える上で大切な要素のひとつである音について、振り返ってみよう。

中島三枝子



②音を楽しむ／水琴窟

①静寂な環境

③音を楽しむ／ししおどし

邦楽・洋楽と音文化

ミュージカル評論家
永井宏子

音楽のあるところ、常に人が集う。古くは祭礼や儀式の音楽を起源として、次第に声明や聖歌のような宗教音楽が主流になり、近世に入ってからは歌舞伎やオペラなどの劇場音楽が中心になった。この歴史と発展の道程は邦楽も洋楽も殆ど変わりがないが、二つの音楽と音の文化は随分と異なっている。ひと言でいえば邦楽が単線的で平面的なのに対し、洋楽は多面的で立体的なのである。

邦　楽

近世邦楽の主流である長唄、清元、常磐津、義太夫（浄瑠璃）は実質は歌を主体にした声楽だが、伴奏に三味線を使うので三味線音楽と呼ばれる。三味線は箏、琵琶などと同じく弦を撥や爪ではじいて音を発する撥弦楽器で、胴を撥や爪で打つ場合もある。邦楽器には他に笛、尺八のような管楽器や、鼓、太鼓などの打楽器があるが、各々の楽器が独自の伝統世界を構築しており、囃子方を別として、異種の楽器との合奏技法は発達しなかった。それ故に演奏の音色は単純で平面的だが、総じて洋楽器よりも単体としての音量が大きく、奏法も多彩なので音楽的な充足感は得られる。

邦楽は五音音階からなり、この音階が東洋調の哀調ある旋律を生む要因だが、

それは単旋律で和声を伴わなず、複数の人が歌う場合も斉唱になる。邦楽は五線譜を使わないが、譜面でみると縦に音が重ならず横へ線的に進んでいく。歌舞伎には役者が客席と向かい合う横への動きが多いし、舞台も高さと奥行きが少なくて間口が広い造りだが、音楽構成も同様である。これも日本人の単線的で平面的な性向を表す一例であろう。

洋　楽

洋楽は七音音階を基準にして、歌声は女性がソプラノ、アルト、男性がテノール、バリトンの四部に分かれる。その各パートが異なるメロディーやリズムを同時に歌うことでハーモニーが生まれ、重唱や合唱など歌声の多面性を楽しませる。楽器の代表は弦を鍵で叩いて音を発生するピアノだが、通常は音色に多様性を求めて二種類以上の異なる楽器を同時に演奏する。その典型はオーケストラで、ヴァイオリン属と呼ばれる弦を弓でこすって音を出す各種の弓弦楽器を中枢にして、さまざまな種類の管楽器や打楽器にハープなど数多くの楽器が、指揮者の統率の下に演奏される。

オペラの場合は演奏者が100名前後にも上り、歌手たちと共にスケールの大きな音楽劇を創出する。この音楽を最高に効果的に響かせるのが天井が高くて空間の広いオペラ劇場である。華やかな装飾が施された馬蹄形の客席は、劇場が貴族の社交場でもあったためだが、作曲家リヒャルト・ワーグナーが新形式の客席を考案し、以降はそれが主流になった。

今世紀に入りジャズやロックが誕生したことで、音楽の流れはメロディーからリズムへと移ってきた。邦楽と洋楽とのクロスオーバーも盛んになりボーダーレス化してきた。電気を使った表現媒体の出現が、音色や音響の状況を一変した。電子楽器もその一つだが、映像や録音が、生の音よりも機械を通した音で音楽を聴くことを普及させたのが最も大きい。

私の専門である音楽劇の分野では、電気で音を増幅させるPA装置がダンスの人気を急増させた。今日のミュージカルの隆盛は、踊りながら歌うことを可能にしたピンマイク無しには有り得なかった。しかし舞台の魅力の第一は「訓練された声」にあるので、新たに出来た劇場の中にはPA使用を前提としたような造作が間々見受けられるのは残念である。

幸い、この冊子の主な読者は建築関係の諸氏とのことなので、終りにお願いを。作品によってPA使用は構わないが、劇場空間は人間の肉声が隅々まで届くよう入念な気配りをして頂きたいと思う。

現代日本の音環境
～自然な音と人工音

サウンドスケープ研究機構／㈱LAO
田中直子

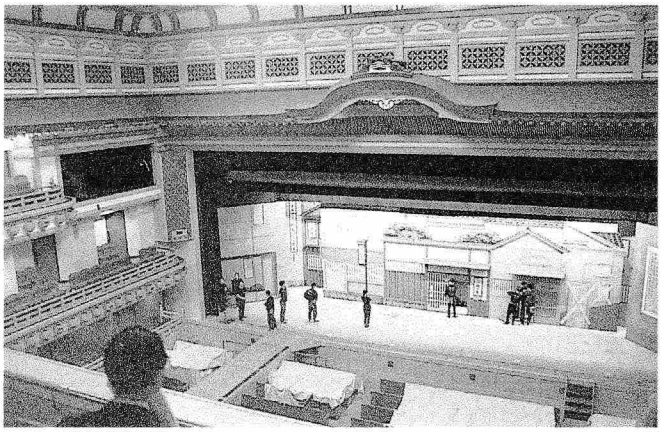
■音環境の質的変化

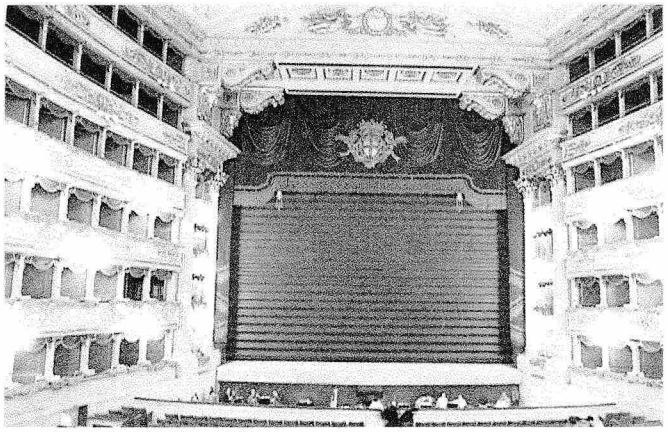
今世紀、日本の都市の風景が驚くほど様変わりしたように、音環境も大きく変容している。時代が進むにつれて全般的な音圧レベルが上がったことは確かだが、それ以上に顕著なことは、自然な音や生の音（ここでは自然界の音だけでなく、人間の肉声や活動の音に至るまでのアコースティックな響きの音を含む）が聞き取りにくくなり、代わって機械音や電子音、拡声器を通した人工の音が目立つようになったことだろう。

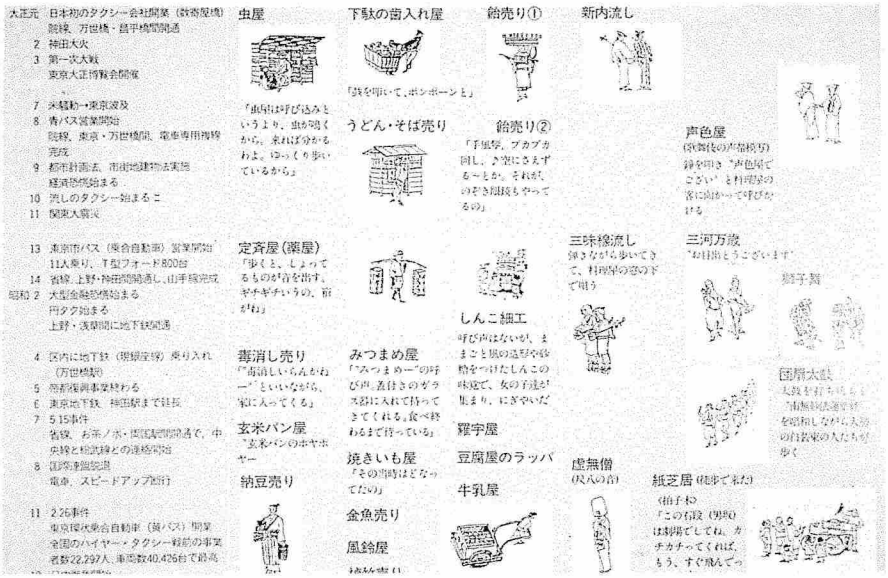
車中心の交通システムおよび物流システムの変化に伴う通りの音の均一化（物売りの声や売り買いのやり取りの声から交通騒音および宣伝放送・BGMへ）、また駅や公共空間における案内放送やベルなど、管理のためのスピーカ音の増大、そして住宅内における家電の普及に伴うモータ音、連続音の増加と電子音によるサイン音の出現など、あらゆる場面において、電気メディアの音が支配的になっている。

■自然な昔が聞き取りにくくなったのは？

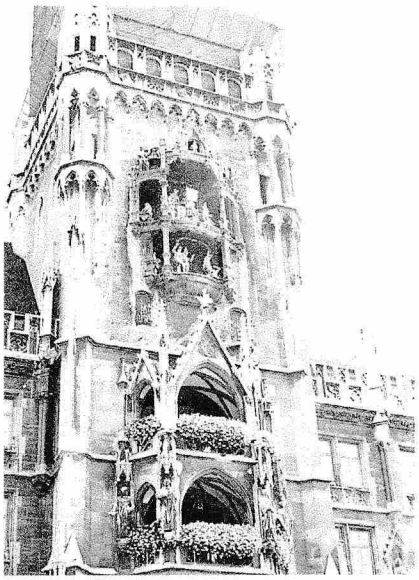
一般的には都市化の進展ともに自然が失われ、その音も減少していると考えられる。しかし、東京でもちょっとした草


④日本の劇場／京都南座


⑤西洋の劇場／スカラ座



⑥記憶で綴る音年表


⑦時を告げる時計塔

むらがあれば、10種近い虫の音を聞き分けることができる。ただし、その聞き分け自体は容易ではない。周囲の交通騒音だけでなく、アオマツムシという帰化昆虫が、樹上からリーリーとうるさい程に鳴き立て、本来のひそやかな虫の音をかき消してしまっているのである。

また、お寺の鐘などは、日々鳴らされることが少なくなってきているが、鳴っていても、聞き取れない場合もある。住まいが密閉化したり、生活自体に余裕がなくなり、鐘の昔に耳を傾ける機会がなくなってしまっているのである。

このように、自然な音、生の音が聞き取りにくいという事態には、音および音源そのものの消失に加え、他の大きな音による聴取妨害、そして聞き取る側の生活の在り方に応じた聴取困難な状況という原因を認めることができる。

なお、駅のホームで野鳥の囀りを、盲人用信号機でカッコウの鳴き声をスピーカで流すといった、自然の音のようで自然な音でないことがあるが、これは日本の自然音志向の安易な現れと考えられる。

■日本社会を映す人工音～音楽とアナウンスの多用

ところで、増加しつつある人工的な音の中でも、日本の場合、音楽とアナウンスの多用が耳につく。駅前やモール商店街などに設置されている仕掛け時計や音のモニュメントからは、本場ヨーロッパの鐘やオルゴールを電子音で真似た陳腐な音が流され、景観が問われる観光地においてもその場にそぐわない音楽がサービスの名目のもとに延々とがなり立てられる。また、公共空間では、合成音声が絶え間なく案内や注意を呼びかけている。

これらの音楽過多現象からは、明治以来強引に欧米文化を輸入・模倣してきた歴史的因縁に起因する「音楽＝快適、楽しい＝喜ばれる」という短絡的な発想と、疑似物やキャラクターなどで集客や話題性を狙う幼稚さが窺い知れ、注意を促すアナウンスからは、自己責任を負いたがらず、公の管理に依存する日本社会の有り様を見てとることができる。

■日本の音志向を生かしたパブリックな音空間づくりへ

今後日本の音環境を向上させるためには、過剰な音を整理して可能な限り自然な音を回復することがまず必要だが、電気メディアで再生音を流す際にも、一音の中での複雑な音色、余韻、ゆらぎ、間といった日本独自の音志向を生かした音づくりが望まれる。

そして、音を受け取る側の問題として、過剰気味な音の中からも、ひそやかな音を聞き出せる耳を育むことが必要であり、それを可能にするゆとりある空間およびきっかけづくりが今後の都市づくりの課題と思われる。

aaca '98事業委員会研修旅行

aaca会員
株式会社　集研設計
HIDEYUKI SEGAWA
瀬川　秀之
東京都新宿区荒木町5番地SEIビル
TEL03-5363-7061

■日　時
平成10年9月25(金)～26日(土)
■場　所
香川県寒川町石田東〈門入の郷〉

徳島県多西郡石井町藍畑
〈藍染屋敷〉
国定重要文化財―田中家住宅

徳島市佐古七番町9-12
〈古庄染工場〉
県指定無形文化財―古庄理一郎氏

徳島県鳴門市国立公園内
〈大塚国際美術館〉

週始めより台風の様相をきわめていたが、当日は、四国の土佐地方では大雨との情報があった。

待ちわびていた、世界初の、唯一の美術館へ行かれるとの思いで、日が近づくにつれ、わくわくしていた。

思い出せば、四国へ渡るのは、今回で、3度目である。我が旅行記を紐解けば、なるほど、2回共船で渡っている。昭和58年と、平成4年であった。平成4年は、瀬戸大橋より入り、鳴門大橋をバスで走ったが、明石海峡大橋は未だ無かった。

今回は、航空機と、帰りは、バスで新大阪迄直行である。

前夜は旅行気分満点で、翌朝早く起きて、羽田へ向った。羽田で皆様と和気相々の御あいさつを交した。

空へ飛んだ、外界は、曇り雨で、灰色空の飛行であったが、高松空港では、小雨程度で特に風は無かった。大阪や、他の方面の方々とお会いし、バスに乗込んで、目的地寒川町へ行った。バスガイドさんのお話によると、香川県は雨が少なく農業用の溜池が1万2千ヶ所もあったとの事、あちこちに見うけられる。

今は池田ダムの完成によって、減って来ているとの事。

前方に一際、色彩かな大跨線橋が出現した。これぞ平成9年度の第7回AACA特別賞に選ばれた門入ブリッジであった。椿の城、冒険の舞台も散見できた。

まづは町の方々と、設計者による町おこしのお話を聞き、大変な前向きの努力のたまものをうかがった。なごやかな昼食会の后、見学に移った。

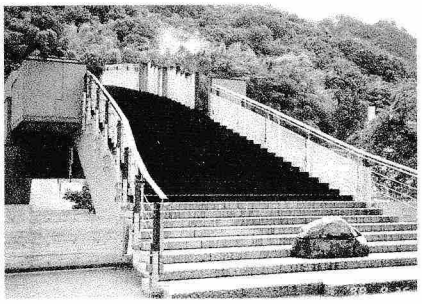
外観は堂々としたものだった、つぶさに見渡すと、なかなかの極め細いアイデアで、橋の上り口に、石が中央に置いてあるが、邪魔を感じさせない。いたる処に余裕らしきところがあり感心した次第であった。

椿の城の屋根に椿の花の咲きほこる様が目に浮ぶ、内部のトイレ、洗面、子供がわいわい遊ぶ様が見える様だ、日が照って来て、外を歩くのに時を合せた様であった。(12：00～13：35)

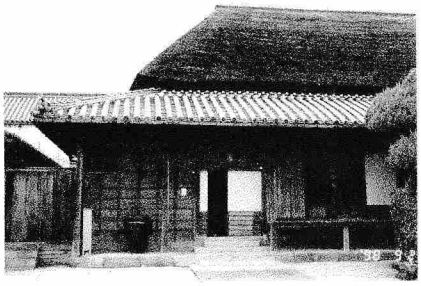
雨はすっかり上りバスは徳島県へと向った。

田中家住宅に着いた、昔の大庄屋とか陣屋の構えでなく、やわらか味が感じられる造りである。グリーン色の概要書を頂いた。住宅敷地図、みどころ、地図がある説明書である。何代目かの品の良い年配の奥様が、さわやかに説明された。北側の吉野川の毎年の氾濫のため敷地造成に取り掛り約30年の歳月で完成したとの事。藍工房と倉庫、住宅で、11棟ある内、主屋の屋根だけが、よし茸で、水害の時、屋根が浮く様になっているとの事、避難の時は、屋根の上に出られ屋根が舟の様になって助かるとの事、ほとほと感心した。(3：00～3：45)

椿の城



門入ブリッジ



藍染屋敷

aaca広報委員
株式会社ＳＰ建材エージェンシー　専務取締役
TAKESI WATABE
渡部　毅志
神奈川県川崎市高津区千年410-7
TEL044-798-8267

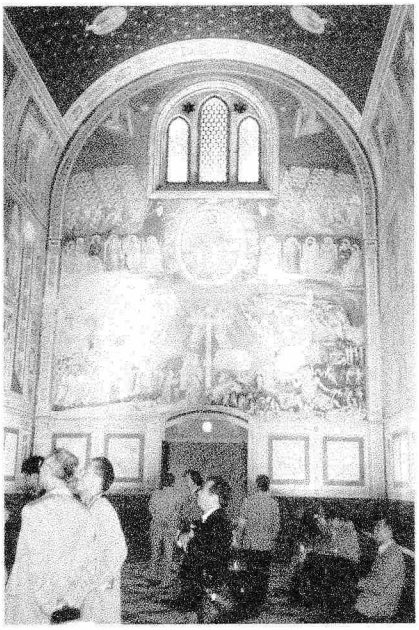
ました。さすが伝統の名家今は薬（くすも）丈で染る家は5軒位しかなく、徳島の薬は世界一良質の物が作られる事は世界中で知られ、薬が作られる気候、風土に恵まれ、天然薬丈を使って江戸時代の行程を再現し染めている様です。日本古来の物として、次の世代に残してゆく文化で有ると改めて思いました。

今日の宿泊地大塚「潮騒荘」へと向う。一夜明け雨上がりの竜宮城の様な欄干の潮騒荘の目の前に、ニューヨークの国連の前に見る様な世界の国旗に迎えられ、緑の景観を、第一に考えられた地下3階、地上3階と回りの景色のバランスがすばらしい、ゆったり落着いた美術館の建物が、中に入るとまたびっくり空間が大きく、エスカレータにて上に、別世界に入り込んだ様に、本物と同じ物を作ってしまうという、大きな大きな発想と夢が世界の西洋名画の絶品のすべてが一同に集められ、紙の上に感想を書くなど申し訳なく、唯々感銘と絶賛と皆様自分の目で見に行くべき宝の山の美術館、そしてとても心豊かな幸せな気分にしてくれると思います。

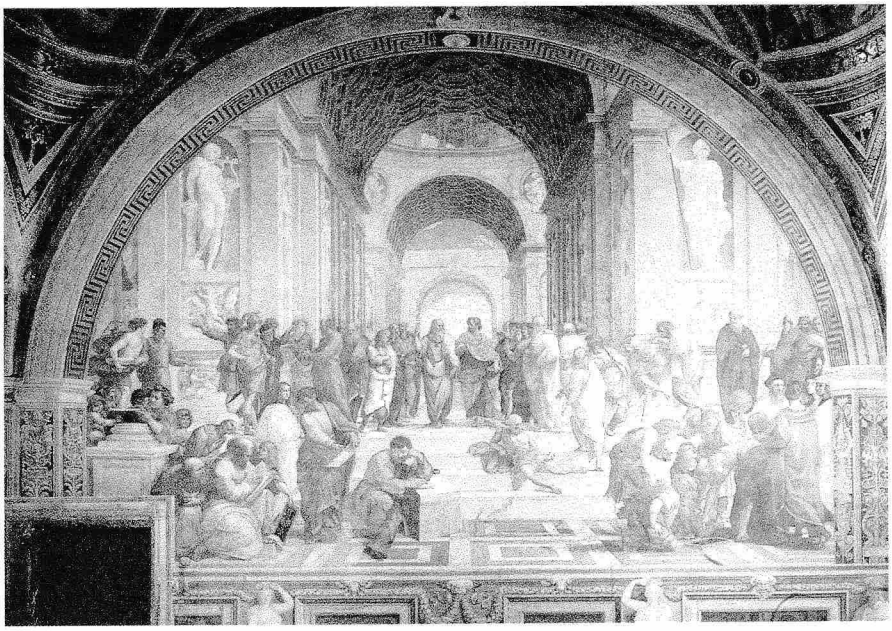
最後になりましたが設計者の阪田誠造先生に御案内を受ける事が出来、より以上の幸せを感じ拝見する事が出来ました事を感謝し、大塚オーミ陶業㈱さんの御厚意を有り難うございました、心より御礼を申し上げます。

今年の夏は関東・東北地方の大雨による洪水被害、それとは対象的に九州・四国地方は、日照りによる水不足が続き、四国の一部の地域では時限的に断水が行われたとの事であった。そもそも四国の中西部は一級河川が少なく水には恵まれない土地らしい。今回訪れた、門入の郷は香川県のダム事業の一環として行われたものであり、「門入ブリッジ」の多彩な色使いは「橋」というより「モニュメント」的なインパクトとシンボル性を与え「椿の城」は人が集まり「遊ぶ」ための象徴的建造物となりえるものと感じた。寒川町の助役さんの話によるとまだこの一帯の集客を目的とする開発を行っていきたいそうであるが、一つの提案として自然と共生してながら楽しめる施設や道具。例えば「水上アスレチック」「ボート遊び」「キャンプ場」、はたまた遊び終えた後の「温泉めぐり」などが出来れば県内外からも集客できる一つの観光スポットとなりえるのではないかと思う。「門入の郷」の見学が終わり一路徳島県の鳴門へ向った。夕刻は大塚グループの「潮騒荘」にて、盛大な歓迎を受け大いに楽しませていただいた。翌日「大塚国際美術館」の見学をさせてもらったが何といっても驚いたのが1000点以上もの世界的名画が展示されている事。それは「オルセイ美術館」「プラド美術館」を初め200余もの美術館が所有する名画が時代別、テーマ別に一堂に会しているもので、他に類を見ない企画であるといえる。ヴァティカン宮殿に描かれているラファエッロ作「アテネの学堂」などのフレスコ画は壁画そのものまでも再現されており本物と見間違う程であった。これらの名画がこの後500年、1000年と、経過した後、原画がどれほど残っているだろうと考えた時、考古学の世界では陶磁器が過去の時代の文化を語る上で重要な証言者である様に、この陶板による名画保存は大きな歴史的意味を持つのではないかと思う。最後に今回の見学会を企画して下さった事業委員を初め寒川町の方々、設計士の多田善昭氏、オーミ陶業の垣内専務、玉見理事に大いに感謝したい。

聖家族（ドーニ家の聖家族）



スクロヴェーニ礼拝堂壁画



アテネの学堂

時代の華一輪

aaca理事
彫刻家
東京芸術大学学長
KIICHI SUMIKAWA
澄川 喜一
東京都清瀬市上清戸2-14-12
TEL0424-91-2150

東京湾アクアライン モニュメント

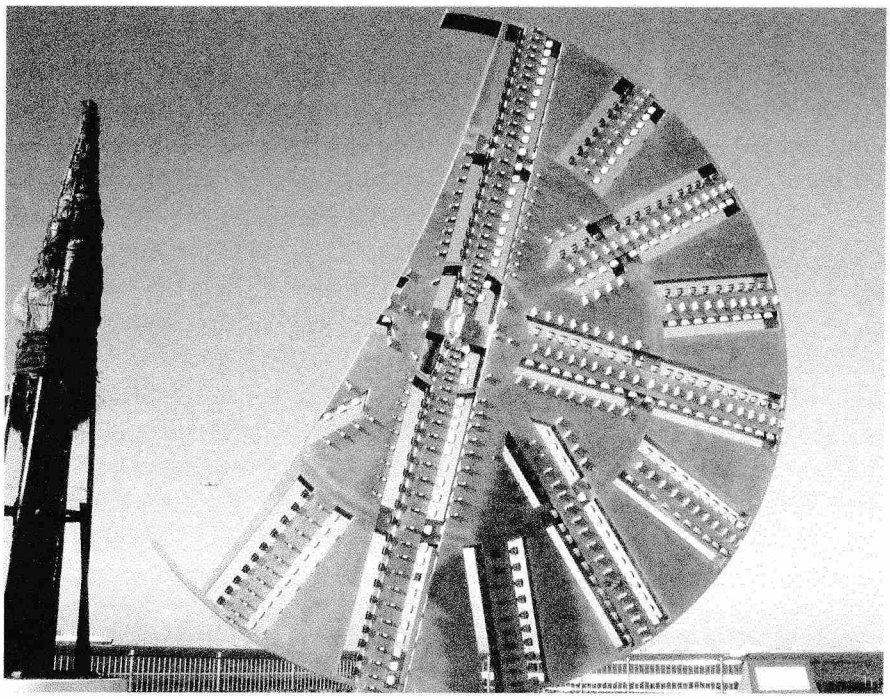
昨年、東京湾アクアラインが開通しました。丁度8年前、川崎から木更津まで全長15kmの横断道が着工れ、10kmは二本の海底トンネル、残り5kmは海上の橋となる現場を拝見しました。

シールドマシンと云う直径14m余の巨大な掘削機で見事なトンネルが造られました。その中間に換気塔が計画され、かたちのご相談を受けました。

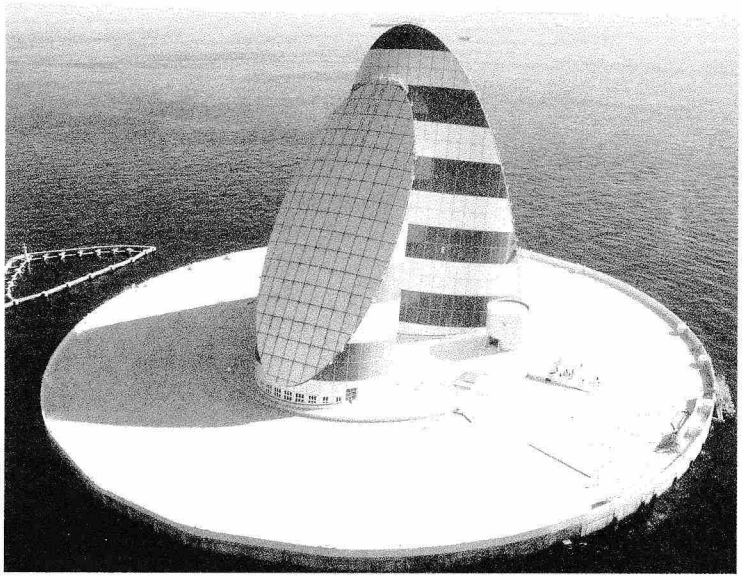
東京湾のど真ん中で景観に適すると同時に船の航行上視認性に適すること、主目的である換気機能に優れていること等が提案され、換気機能を徹底的に追求すれば合理的なかたちができるはずと云うことになりました。物理学のベルヌーイの定理により大塔（H：90mφ70m）と小塔（H：75mφ37m）の円柱を東京湾の常時の風向に対して並立し、スリット（すき間）をつくることで気圧差ができ、自然の風を利用した強い排気力を作り出そうと建築や空力の専門家が協力され、空力的デザインをと云うことになりました。二本の円柱を12度傾け円柱の外側を、お正月の松飾りの竹の先端のようにそぎ落したかたちにし、見る角度により船の帆にも見える動きのあるかたちにしました。偶然ですがヨットが安定してスピードが出る時の理想の角度に似ているそうです。羽田空港に近く、間断なくジェット機が飛び、一日1,200余艘の船が出入する海上の景観に適し、換気機能に優れたかたちを探すことは難しい仕事でした。

木更津側の〈海ほたる〉にトンネルを掘削したシールドマシンを再構成した〈カッターフェイス〉と云うモニュメントを作りました。

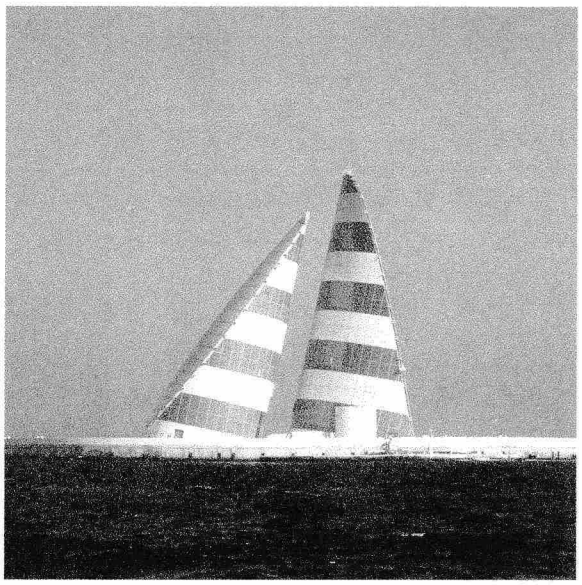
人の目に触れることなく海底トンネルを掘った手作りの巨大マシンは工事終了と共に使命が終り分断されてしまいます。実際に使われていた特殊鋼の刃を記念として取り付けました。これは世界に誇れる日本の建設技術の記念碑であると同時に大プロジェクトに参加された多くの人々のモニュメントでもあります。一つの彫刻の内に秘められる内容は、それぞれ深いものがあるようです。



カッターフェイス



換気塔鳥瞰



換気塔

aaca会員増強委員
建築家
㈱日建設計常務取締役
YOSHIAKI OGURA
小倉 善明
東京都文京区後楽2-1-3
TEL03-3813-3361

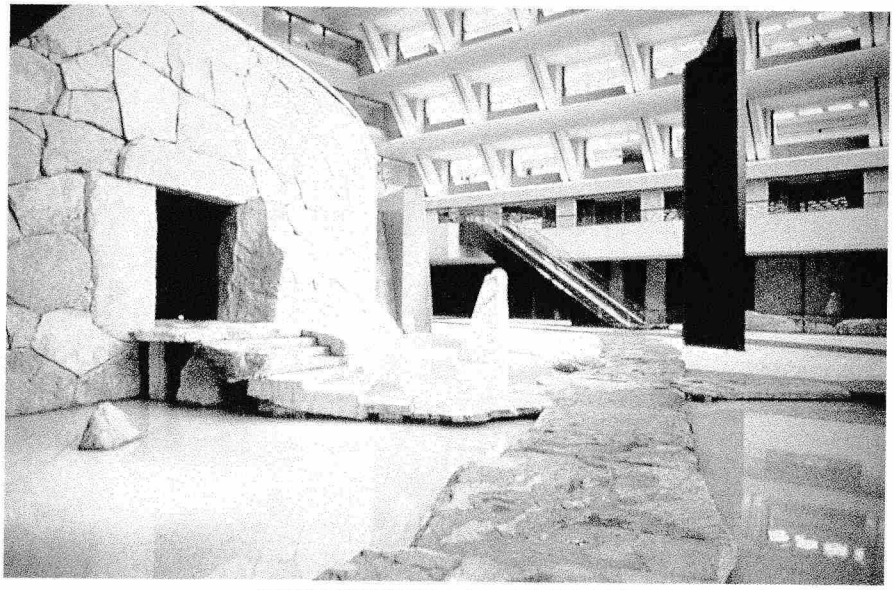
建築を共に創る

建築を創るプロセスでいろいろな人の協力を得ることがいかに大切であるかを学んだのは、35年ほど前アメリカに留学したときのことである。勿論建築は、多くの建築設計者や構造や設備のエンジニア無しには出来ないが、当時の我が国に比較して他分野の多くの専門家が当時アメリカでは建築に参加していた……ランドスケープ アーキテクト、ライティングコンサルタント、アーティスト、グラフィックデザイナーと言った具合であった。特にランドスケープや照明の分野は日本では遅れていたし日本でこの分野の人を育てるのも急務であると考えた。その後この分野の人達も増えてきたとは言え、世界レベルからするともっと人が育って良いと考えている。照明とかランドスケープ、アートワークは建築にとって脇役のように考えられがちであるが実は時には主役でもある。多くの外国の人達が、日本の古建築をほめるのはまさにこの視点からである。木立や、石組みや、明かりと一体になって建築が存在する空間を見つめるとき建築が控えめに場を創る側に回っていると感じることがある。

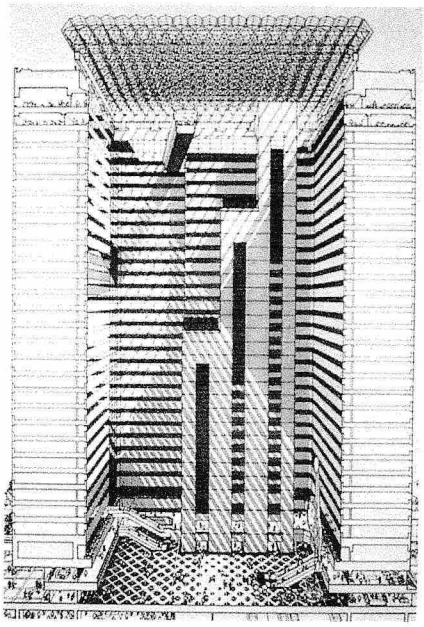
他分野の人と一緒に建築の設計をする場合その人とコンセプトを分かち合えるか、あるいはコンセプトを創ることが出来るかがコラボレーションが成功するかどうかのの鍵となる。照明の世界では世界の第一人者であるクロード・エンゲル氏に新宿NSビル（1982）の照明計画を依頼したとき、彼と特に話し合ったことは、空間の意味合いは勿論であったが、空間を包む素材に対する考え方であった。彼は、建築そのものが照明器具であるという考え方であったから、その素材が光をどの様に受けとめてくれるのか大切であった訳である。光を受け止めるという視点で建築全体を見直すことはとても勉強になったし、この経験は貴重であった。

後に、カルガモの池で有名になった三井物産本社ビル（1976）の前庭の池はボストンのランドスケープアーキテクトであるササキ氏（ササキ・ドーソン・ディメイ）との共同作業の結果である。交通量の多い前面道路側に騒音をマスクするための水音のする落氷壁を創り中央に静かな水面を配した、人に心地良く、安全なランドスケーピングが、カルガモの子育てにも最適であった。特に池の周りに手すりをつけず、かつ安全なように池の縁を浅くしたことが、カルガモの雛が水から飛び上がるチャンスを与えたようだ。

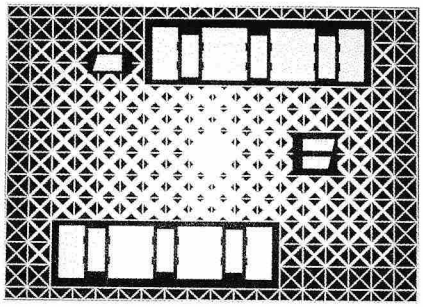
ハーバード大学でグラフィックデザインを教えていた片山さんとは、やはり留学当時出会った。片山さんが建築を良く理解されていることがきっかけになり、その後幾つかのプロジェクトでいろいろなことをお願いした。床のパターンあり、緞帳あり、絵画あり、彫刻あり、石積みあり、壁面ありと色々であるが、建築と一体になっているところが特徴である。どれ一つとして建築の一部になっていないものはない。なぜこういう結果になったかは、当時は特に意図したわけではなかったが後で考えてみると建築の一部になったアート、あるいはアート化された建築の部分を創ることを、お互いに実現したのではないかと考える。建築の空間に単にアートをおくのであればそれほど苦労はないが、相互にインテグレートしたものを創るとなると格段と難しくなる。お互いの領域に入り込み話し合うことは難しくもあるが、出来たときは楽しい。そこには、達成感の高さ、自分だけでは出来なかったものに手が届いたときの満足感を皆で分かち合う喜びがある。



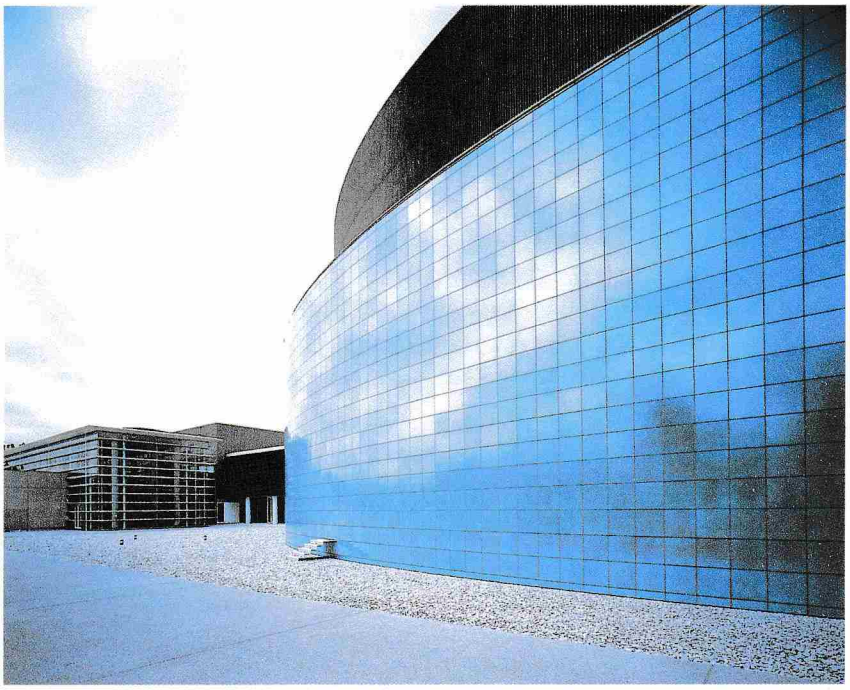
松下電器産業情報通信センター　アトリウム内部（石組み及び彫刻：片山利弘氏）



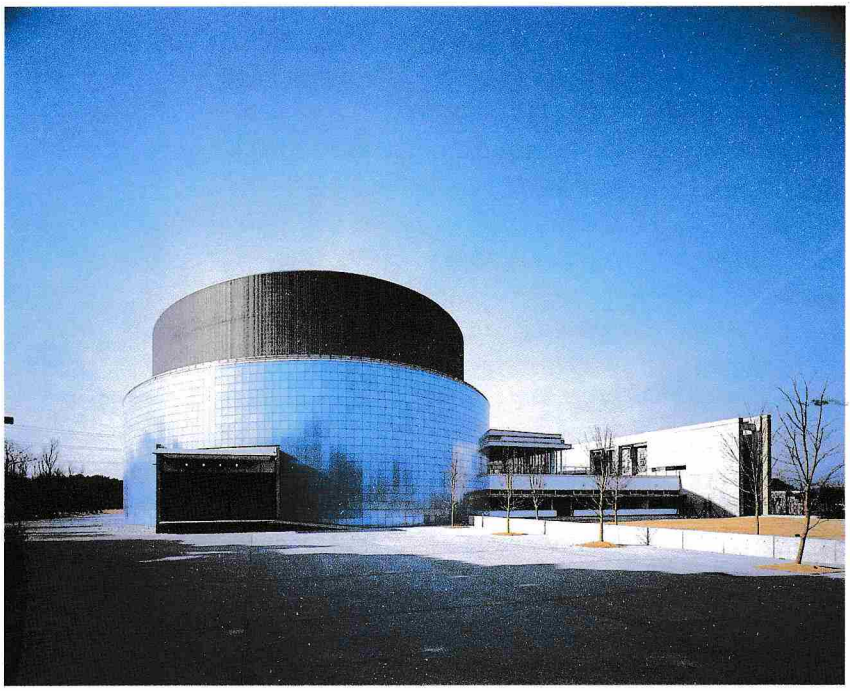
新宿NSビル　断面図



新宿NSビル床パターン（デザイン：片山利弘氏）



空を映す



季節を映す

600×600×13m/m大型陶板ラスター

――かずさアカデミアホール――

設計／坂倉建築研究所
施工／竹中・三井・錢高特定建設工事共同企業体

大型陶板

大塚オーミ陶業

●OTセラミック　●テラコッタ　●美術陶板

東京｜〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-6 TEL03(5295)3555 FAX03(5295)3556 大阪｜〒540-0021 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL06(943)6695 FAX06(943)6487